

夏目漱石「明暗」論

——主人公津田夫婦をめぐる人間関係について——

高 鵬 飛

一

「明暗」は大正五年五月二十六日から十二月十四日まで、東西の朝日新聞に百八十八回連載された漱石の絶筆となった未完の作品である。荒正人の指摘したように「漱石の全作品群のなかで、最も複雑な問題を含んでいる」⁽¹⁾作品である。また、小宮豊隆も『「明暗」は、漱石の作品のみならず、明治・大正・昭和を通じて、恐らく類例のない、ユニークな作品である。(中略)これほど精細、これほど敏活、またこれほど深刻に、人間の私を掘り起こして見せたものは、西洋に於いても、殆どその比を見ない。』⁽²⁾と評価している。

「明暗」は、漱石文学に於ける特別な存在と価値を持っている。小宮豊隆の評したような「ユニークな作品」である。漱石は「彼岸過迄」「行人」「心」の一連の創作により、「理念への傾斜を強く見せてきた」。「道草」で「実在への逆傾斜を試み」、「明暗」にいたっては、「そのいずれをも含み、かつ、越えるような境地に脱出しようと渾身の努力を演じたのである」⁽³⁾と荒正人が強調して、理念と実在として分けて考える見方に対し、「いずれをも含」む視点を

示したところが特徴である。

複雑な人間関係を作り上げて、心理的なドラマとした「明暗」は、日本の近代的な自我に於ける人間像、またその登場人物の細かい心理と人間関係の葛藤を生き生きとして描き、深く掘り下げて、「漱石最高の到達点であった。と同時に、出発点でもあった」⁽⁴⁾という大岡信の評が妥当であると思う。

百八十八回の大作の構成は津田の病気をめぐって二週間前後の出来事を描いている。その具体的な内容は、病院での診察とその後の手術と、「多事な一週間の病院生活」(百五十三)を描き、その後の温泉行きで中断する。そこでは、津田夫婦の結婚生活を中心として、いろいろな人間関係を纏いながら、作品の世界が展開されていく。今までの殆どの作品のように男の心理、津田の心理を通じてしか描かれなかったのではなく、お延をはじめ、お秀、吉川夫人、清子などの、様々にゆれ動く、女性の心理描写が精密を極め、より広くて新しい文学的視野の展けた作品である。または、社会的には、明治末期、大正初期の人々を描いた人間劇のような作品でもあろう。

本稿は津田夫婦を中心とした人間関係について論じることにした。「この二人にからむ人間関係、即ち、津田の叔父藤井夫婦、お延の親類岡本夫婦、岡本の二人の娘継子と百合子、津田の上司である吉川と、その妻であつて津田の対女性関係に陰険で露骨な干渉をし、津田からもその権利を認められている吉川夫人、津田の妹お秀、津田の昔の恋人清子、(中略)津田の旧友小林などの諸人物が、いずれ劣れぬ密度を以て描き出されている。」⁽⁵⁾これは大岡信が作品の中の複雑な人間関係について見事に纏めたものである。次は津田、小林、お延を中心としてお秀、吉川夫人、清子との関係と葛藤をめぐり、作品の真相と登場人物の複雑な人間関係について分析し、作品の内部と主題へ近づきたい。

二

医者は探りを入れた後で、手術台の上から津田を下した。(一)

これは「明暗」の第一回の冒頭である。簡潔な冒頭であるが、診察の結果、津田の内部の病根を見付け出した。「医者」「探りを入れ」「手術台」「津田を下した」は作品と深く繋がり、診察、手術、それから、救うという三つの段階を含んでいて、そして、「今日疎通を好くするために、そいつをがりがり掻き落して見ると、まだ奥があるんです。」「根本的な治療は切開です」と医者が言った。作品の第一回は作品の全体と深く繋がり、特に「まだ奥がある」と言う言葉が、密かに作品の真相を暗示している。

作品の第二回も重要な節である。病院を出て家へ帰る電車の中で津田の気分は沈んでいた。「去年の疼痛がありありと記憶の舞台に上がった。」「どうしてあんな苦しい目に会ったんだろう」。この「ありあり」と「苦しい目にあつた」のは、肉体の病気だけではなく、去年の失恋の「疼痛」とでも理解したら分かりやすいと思う。「この肉体はいつ何時どんな変に会わないとも限らない。それどころか、今現にどんな変がこの肉体のうちに起りつつあるかも知れない。そうして自分は全く知らずにいる。恐ろしい事だ」と考えて、津田は心の中で叫んだ。

「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。」この「精神界」こそが作品全体のみそではないかと思われる。そして、次の表現で「のに」を二回繰り返して非常に深く津田の心理を描いた。

どうしてあの女は彼所へ嫁に行ったのだろう。それは自分で行こうと思ったから行つたに違ない。しかしどうしても彼所へ

嫁に行くはずではなかったのに。そうしてこのおれはまたどうしてあの女と結婚したのだろう。それもおれが貰おうと思ったからこそ結婚が成立したに違いない。しかしおれはいまだかつてあの女を貰おうとは思っていないかったのに。(二)

ここでは既に津田の「過去」が暗示されながら、その津田の恋愛と結婚生活の本質をもほのめかしている。ただの肉体の病気だけではなく、心の世界、即ち「精神界」での問題へと繋がっていること、この両方を意味しているのである。現在の肉体の病気も過去の「精神界」の問題とつながっている。言わば、「過去」は「現在」にとって重大な意味を持っている。平岡敏夫が語った如く「漱石の場合、『過去』への旅は、とりもおさず、『現在』への照明となっており、(中略)往きて還らぬ『過去』への旅ではなく、『過去』への往路そのものが『現在』への帰路なのである。」^⑥言い換えれば、「過去」は「現在」に影響を与えている。「現在」は「過去」の延長と変身である。「過去」の真実を知らなければ、「現在」の問題が理解できない。

「明暗」は愛情の葛藤、又は人間のエゴイズムという「精神界」を中心として、手術、入院に関する金銭問題及び「過去」への旅である温泉場での出来事をめぐり、かなり複雑な人間関係に絡んで、展開していく。「過去」への探りにより、「まだ奥がある」ことが分かる。「明暗」の「過去」は意味深く、謎に包まれる作品を理解する肝心な鍵である。

津田は大学を卒業して相当の職に就いているにもかかわらず、夫婦の虚栄心と見栄を充たすにはまだ不足なので、毎月京都の父親から仕送りを受けている。そして、お秀の夫、堀の尽力によるその金で津田が買い与えた贅沢なダイヤモンドの指輪をお延の指に見て、お秀は裏切られたと思った。お秀は津田が嘘つきで、父親を裏切ったことを主張する。そして、お延が津田が父親から借金することを知っていながら、そのことを省みずに、二人の夫婦生活を贅沢

にしていることに、お秀は反感を抱きつつ、伝統的な家族を守る立場から津田を攻めた。

兄さん、妹は兄の人格に対して口を出す権利がないものでしょうか。よし権利がないにしたところで、もしそうした疑を妹が少しでももっているなら、綺麗にそれを晴らしてくれるのが兄の義務——義務は取り消します、私には不釣合な言葉かも知れませんが。——少なくとも兄の人情でしょう。私は今その人情をもっていらいっしやらない兄さんを眼の前に見る事を妹として悲しみます。

それに対して津田は強く反発した。

お前に人格という言葉の意味が解るか。たかが女学校を卒業したぐらいで、そんな言葉をおれの前で人並に使うのからして不都合だ。

事実とは何だ。おれの頭の中にある事実が、お前のような教養に乏しい女に捕まえられると思うのか。馬鹿め（百二）

お秀は良人である堀に対する立場上、兄の津田が約束をきちんと果たしてくれなければ困るわけである。兄の津田だけではなく、お秀は勿論、その背後に控えている嫂のお延を間接に攻めているのに決まっている。津田にも分かっている。津田はお延にそれほど情熱を持つてはいないが、「妹より妻を大事にするのはどの国へ行ったらって当り前だ」（百二）というはつきりした近代的な家庭の意識を表した。津田「から見た妹は、親切でもなければ、誠実でもなかった。愛嬌もなければ気高くもなかった。ただ厄介なだけであつた。」（百十）津田はお秀に頭を下げるべきなのに、下げる気が毫もなかった。これは、その男が女を見下ろす時代の男女の差も表している。

吉川夫人は権力の代表者として潜在する異性愛と支配欲を満足させようとして、夫の部下であり目下の津田を可愛

がつているおせっかいな女性である。そして、清子と関ともかわりあいを持つている、いささか奇妙な登場人物である。津田はお秀の前とは違い、吉川夫人の前では弱々しくて未熟な構えを示していた。上司である「吉川家の門を潜る必要があった。それは礼儀のためでもあった。義理のためでもあった。また利害のためでもあった。最後には単なる虚栄心のためでもあった。」(九) また「やはり男女両性の間にしか起こり得ない特殊な親しみ」(十二)のためでもあった。それから、津田にとつて「彼は心置なく細君から嘲られる時の軽い感じを前に受けながら、背後は何時でも自分の築いた厚い重い壁に寄りかかっていた」(十二)るのは、主には吉川の「細君から子供扱いにされるのを好いていた」(十二)津田の功利的な行動であり、打算であろう。しかし、津田はその吉川夫人の前では、折々「臆病にも見えた。注意深くも見えた。または自衛的に慢ぶる神経の光を放つかのごとくにも見えた。最後に、『思慮に充ちた不安』とでも形容してしかるべき一種の匂も帯びていた。」(十二)最も興味深いことは津田がその吉川夫人なりのもくろみに乗つて温泉場へ清子に会いに行くという経緯である。津田夫婦を操ろうとした吉川夫人の秘策により、温泉場で津田と清子が再会した。それが、津田に対しての根本的な治療であろうか、二人が「過去」の愛に戻るか、或いはそこできっぱり絶縁させるか、津田を不安の情愛から救い出せるか、「夫人の設計通りにゆくか、或いは意外の方向をとるか、その辺は十分わからない。」(七)要するに、旅費まで出して世話好きな吉川夫人がしたことがかえつて問題を大きくさせた可能性が大きいし、または誰かに動かされなければ自分の考え方や生き方を変えることが出来ない津田の優柔不断さと卑怯さが浮き彫りにされてくるところでもある。

津田と関と清子という三人の關係が事実上、「明暗」の中での本当の男女の三角關係であると思う。ただし、中断された作品の中では殆ど描いていなかったもので、その三人の過去については謎が多く残されている。分かるのは、恋に落ちていた津田と清子がいよいよ結婚する所で、清子が急に関と結婚したことだけである。これはそれぞれの本人

にも家族にも親類、友人、周りの社会にも大地震のような衝撃を与えた事件であることは想像に難くない。大きな体をした津田も「子供のように泣いたり唸ったりし」（十二）だが、漱石の今までの作品とは違い、落ちぶれた「門」の安井のようでもないし、自殺した「心」のKでもない。津田は過去を持っていながら、お延と結婚した。

津田は自己中心の知識階級の弱々しい代表でありながら、自分だけは完全な人間だと思ひ込み、女の心を斟酌することができない欠陥を持っていることは心の病といふことができる。これだけではなく、「あなたは学校へ行ったり学問をしたりした方のくせに、まるで自分が見えないんだからお気の毒よ。だから畢竟清子さんに逃げられちましたんです」（百四十二）という弱点を吉川夫人に批判されてもいる。温泉場で道に迷った時、いままで自分に自信を持っていた津田は「いつもと違った不満足な印象が鏡の中に現われた時に、彼は少し驚いた。これが自分だと認定する前に、これは自分の幽霊だという気がまず彼の心を襲った。」（百七十五）このようなむしろ「精神界」を歪んだ幽霊と、「結婚後彼らの間には、常に財力に関する妙な暗闘があった」（百十三）経済的な貧乏の幽霊はいつも津田を脅かしている。その時、いままで「自分の短所にはけっして思い及ばなかった」（百十五）津田が自分の本質を見出したであらうか。

三

もう一人の登場人物小林は漱石文学の中では珍しい人物である。十九世紀末のロシア文学によく現れた「余計者」と似ている、漱石にとって初めて描いた新しい人物であり、津田、お延、お秀、吉川夫人たちとは違って別世界の存在である。ゆすりめいたいやらしさは小林の魅力であらう。読者に印象づける力もっている大切な存在である。

津田の入院中、小林は留守宅に行ってお延に、

「津田君にはあれでまだあなたに打ち明けないような水臭いところがいぶあるんでしよう」「奥さんあなたの知らなければならぬ事がまだたくさんあるんだ」(八十四)などと、いろいろ思わせぶりなことを言い、お延が津田に不信を抱くようにさせた。

「私はまた生きて人に笑われるくらいなら、いつそ死んでしまった方が好いと思います」とお延は言った。すると、陋劣な小林はお延に警告をした。「奥さん、あなたそういう考えなら、よく気をつけて他に笑われないようにしないといけませんよ」。(八十七) ここは、お延の未来の運命をほのめかしているようである。小林はお延の気位の高い性根をも見破り、彼女の未来への悲劇の予言者のように振る舞っている。津田とお延の真実をはっきり見ていたのは、このような小林かもしれない。無頼に過ごす小林から「余裕のある」人間たちへの批判は意味深く思われる。

津田を代表とする金持階級への憎悪と自己憎悪とを同時に表明し、その為にかえって最も積極的に津田の属する世界に対して痛烈で皮肉な批判者の役割を果たす小林は、食う心配のない人間たちに対する憎悪と復讐心をも抱いている。津田は小林を軽蔑するのと、小林に軽蔑されるのと、両面をもっている。心の豊かな、それなりに真実に生きているといえる未来はむしろ小林のような人間たちに有るのかも知れない。小林にとっては、中流階級の人間たちの苦悩などは贅沢な人間の世迷い言に過ぎない。津田からもらった三十円の中から十円の金を取えて津田の目前で貧しくて無名の青年芸術家にあてつけがましく譲った。卑俗で自棄した小林の更に貧乏人への関心と同情を表したし、経済面上でしか「余裕」をもたない津田夫婦より小林の心の「余裕」をも表した。その金は岡本から出たものであるが、お延は津田に経緯を伏せたまま手渡し、津田はまた手切れ金であることを隠したまま小林に手渡した。その金の由来と使い道について口実を作らなければならない津田夫婦と比べ、小林の若い青年に金を渡した方が堂々としており、明るく感じる。また、津田はその余った金銭を小林に渡すことにより、お延を連れて温泉に行くのを避けた作戦であ

りながら、小林には「余裕」を示そうとした。しかし、小林は言い返した。「實際僕はちっともその余裕なるもの前に、頭を下げてゐる気がしないんだもの。」(百六十二)更に、小林は「余裕」ある社会的立場をすべて津田の浅薄の根源として強く攻撃し、その「余裕」の敗北を認めさせようとした。

『飽く迄も僕の注意を無意味に見せるという気なんだね』

『正直の所を云えば、まあそこいらだらうよ』

『よろしい、何方が勝つかまあ見てゐろ。小林に啓発されるよりも、事実其物に戒飭された方が、遥かに觀面で切実で可いだらう』(百六十七)

津田はむしろ頭では分かるけれども、胸では納得できないはずである。

「小林の欲するのは社会的な解決であつて、自己満足的な救済などではない。」⁽⁸⁾小林にとって耐え難いのは、貧困より深刻な孤独と不安である。勿論、津田に対して、友情を求めていたが、隔てられた。事実、津田も孤独と不安な存在である。ただ二人の孤独と不安は別々であり、形も中身も違うものである。社会の人間關係に縛られている人間と金銭から解放された自由を持つ人間の質的な違いである。また、彼等が抱く不安と孤独はただの個人的な不安と孤独だけではなくて、その社会と時代の違う階級における不安と孤独の反映したものであると思われる。「宗教の還相は、衆人の苦を己が苦とするものである以上、更に苦しいものであらう。自由ではあるが、最後の一人が成佛するまでは成佛しないという菩薩は苦しいに違いない。」⁽⁹⁾

作者漱石にとって「小林という人間が漱石の深い自己省察の結果、彼自身の心情の一面を文学的に拡大し肉附けたものとして描き出されたものであるということの意味するであらう」⁽¹⁰⁾と大岡信が語ったが、この独特の小林と冒

頭の小林医者はある意味では作品の背後に隠れている作者漱石の代弁者のようである。

四

「明暗」の一回から三回までは小説の序章のような部分であるが、お延が第三回までに登場しなかったのは妙に感じられる。これは津田夫婦がそれぞればらであることを意味しているようである。第三回の書き出しも確かにその不仲な雰囲気覆われていることを示している。

角を曲って細い小路へ這入った時、津田はわが門前に立っている細君の姿を認めた。その細君はこつちを見ていた。しかし津田の影が曲り角から出るや否や、すぐ正面の方へ向き直った。そうして白い繊い手を額の所へ翳すようにあてがって何か見上げる風をした。彼女は津田が自分のすぐ傍へ寄って来るまでその態度を改めなかった。

既に津田を見ていたお延は急に正面の方へ向き直って、見ていないような振りをした。この最初の登場はそういうなかなか念が入って技巧的な細君を表している。津田夫婦の新婚生活はこのようなお延との関係を基調としている。

お延は津田と同じ、両親から離れて叔父と叔母の家で育てられた。両者とも自我の意識が強く、肉親の情が薄い。作者漱石も生涯では家族の意識が薄くて、肉親の愛情を味わったことが僅かしかなかったことが思い起こされる。

「お延は自分で自分の夫を掴んだ当時の事を憶い起さない訳に行かなかった。津田を見出した彼女はすぐ彼を愛した。彼を愛した彼女はすぐ彼の許に嫁ぎたい希望を保護者に打ち明けた。そうしてその許諾と共にすぐ彼に嫁いだ。冒頭から結末に至るまで、彼女はいつでも彼女の主人公であった。また責任者であった。自分の料簡をよそにして、他人の考えなどを頼りたがった覚えはいまだかつてなかった。」(六十五) 自己本位を示したお延のすぐ行動に移すイ

メージは外力がなければ中々動けない津田とは全くの反対である

当時、叔父の岡本だけは不思議な目で眺めていた。「あの男は日本中の女がみんな自分に惚れなくっちゃならないような顔つきをしているじゃないか」(六十二) 初対面から津田を嫌っていた岡本は「その後彼の好悪を改めるはずがない」だけではなく、「どうしてお延のような女が、津田を愛し得るのだろうという疑問の裏に、叔父はいつでも、彼自身の先見に対する自信を持ち続けていた。」(六十五) しかし、「女は一目見て男を見抜かなければいけない」(六十六) ということを自ら体現し得ているような自信をもちながらも、一日でも早く叔母の家を出て独立しなければならなかったお延は、津田を選んで愛するよりは自分のために賭けることにした。お延には「自分が津田を精一杯愛し得るという信念があつた。同時に津田から精一杯愛され得るという期待も安心もあつた」。(六十二) けれども、従妹お継の結婚に当っては、お延は既に結婚前の「一目見て」という誇りを失った。お継の「自己の意志を放棄した親まかせの態度をむしろ軽蔑しながらも、彼女は己が身に引き比べてその前途を憐み、このように全く自己本位の態度に始終した自分の結婚ですらかくも不幸なのに、と思わねばならないのである。」^(四)結婚してただ半年しか過ごしていなかったお延は既に前途を憐むように変わってしまった。

結婚して半年たったお延は疑念を持ち出した。「良人というものは、ただ妻の情愛を吸い込むためにのみ生存する海面に過ぎないのだろうか」(四十七) とお延は不満を抱いていたが、体面と見栄を守るために、周りの人間にはそれを隠して幸せぶりを誇示していた。また吉川夫人とお秀達とは近代的な女性の自我意識の強いお延は相容れず、反感を買うことになった。また、吉川夫人はお延がふけていると感じて、挑発的に「まあ老成よ。本当に伶俐な方ね、あんな伶俐な方は滅多に見た事がない。大事にして御上げなさいよ」、つまり「よく気をつけろ」(十二)と津田に警告した。勿論、お延も吉川夫人に対して複雑な念を持っていた。「彼女の空想は会釈なく吉川夫人の上に飛び移らなけ

ればならなかった。芝居場で一度考えた通り、もし今夜あの夫人に会わなかったなら、最愛の夫に対して、これほど不愉快な感じを抱かずにすんだろうにという氣ばかり強くした。」(五十七)「京都に対する善後策を講じ」た時、「用向を帯びて夫人を訪ねるのを嫌った」(百十四) お延にとつて吉川夫人はどれほど苦手であつたかが分かる。同じ女性の立場で、「子供扱いにされるのを好いていた」津田を時に廻る吉川夫人は、津田を独占しようという姿勢を示すお延に対して、ライバルとしての氣持ちを密かに持っている。これに対して、お延もまた何かぼんやりしていながら怪しく感じたようである。お延は普通の女性ではなく、二人の愛の世界が成立さえすれば、他はどうでも構わないという「自我」の強い、完璧な愛情を追求している女性である。それが吉川夫人とお秀を含む周りの人々に反感を起こさせ、対立することになるもう一つの要因であつた。

津田をめぐつての妹のお秀と妻のお延の衝突も激しかった。お延は「自我」、お秀は「自負」の女性であるし、二人ともそれぞれ自分しか完璧な女性はいないと信じている。「お延の新世帯が夫婦二人きりで、家族は双方とも遠い京都に離れているのに反して、堀には母があつた。弟も妹も同居していた。親類の厄介者までいた。(中略)世帯染みた眼で兄夫婦を眺めなければならぬお秀には、常に彼らに対する不満があつた。その不満が、何か事さえあると、とかく彼女を京都にいる父母の味方にしたがつた。」(九十二) お秀にとっては、大切なのは「家」、「家族」である。お延の意識には「家族」というものがなさそうである。あるのは「家庭」、即ち「夫婦二人」だけである。ここにお秀像とお延像の対立がうかがえる。

「お秀のいう『愛』は、日常生活の中に没入した相対的な『愛』であるが、お延の求めるのは、女性の眼に映じた絶対の『愛』にはかならない。」⁽¹²⁾と江藤淳が指摘したように、夫の愛を独占しようとしたお延は津田への愛情は片思ひ的ではなく、津田と自分の二人だけの間に成り立つ、津田に言われる「妄想」の愛情である。「彼を愛する事によ

って、是非共自分を愛させなければやまない。」(百十二) お延の目的としては「家族制度にも日常性にもけがされない『絶対の愛』の獲得である。」⁽⁹³⁾ この「絶対の愛」を追求したお延は、「責任のない」(百十五) 津田と対照になった。寧ろ、お秀の家族全体という気持ちを込めた相対的な「愛」のほうが現実的である。

一方敏感なお延は津田の心にある別の女性の影を感じ、「相手? どんな相手ですか」(百十二)と聞きたいほど、津田との感情の危機を感じて、真相をあくまで追求しようとした。または、その津田の心の女性の影を暴き、邪魔物を追放して、津田の愛を独占しようとする必死の努力を重ねた。しかし、「二人の間に何だか挟まってしまった。こっちで寄り添おうとすればするほど、中間にあるその邪魔ものが彼女の胸を突ついた」(五十七)とお延は痛感した。

津田夫婦の結婚については、「お延は津田を愛してゐる。然し、津田はお延が要求してゐる如くには、お延を愛しない」⁽⁹⁴⁾と小宮豊隆は指摘した。これは津田の性格とお延の極端な要求と関係があるほかに、津田にとってはお延と結婚する前の恋愛事件の結果とも深い関係がある。津田は、お延との結婚に当たっても、偶然にお延に縛られたように見えるけれども、心の空白を埋めるために、功利と見栄のリアリスト津田の必然の選択ではないかと取られてしまう。津田の心は小林の朝鮮行を送る会食での会話で深く探ることが出来る。

『君は自分の好みでお延さんを貰つたろう。だけれども今の君はけっしてお延さんに満足してゐるんじゃないやろう』

『だって世の中に完全なものない以上、それもやむをえないじゃないか』(百六十)

見栄っ張りなお延は技巧的な女性であるが、その技巧は津田にとって見破り易い芝居のようなものにすぎない。逆に、「嘘でも偽りでもないんですもの」(百八十六)という率直な清子は謎いっぱいであり、津田にとって魅力的なうである。

「津田はお延に対して『苦手の感』を起こしながらも、お延を『女だと見下ろし』、見下ろしながらも『底気味の悪い思ひ』をしなければならなかった。」⁽¹⁵⁾作品の中では二人の「愛の戦争」という夫婦生活を論説した部分がある。

「いつでも敗者の位地に立った彼には、彼でまた相当の慢心があった。ところがお延のために征服される彼はやむをえず征服されるので、心から帰服するのではなかった。堂々と愛の擒になるのではなくて、常に騙し打に会っているのであった。お延が夫の慢心を挫くところに気がつかないで、ただ彼を征服する点においてのみ愛の満足を感じず通りに、負けるのが嫌な津田も、残念だとは思いつながら、力及ばず組み敷かれるたびに降参するのであった。」(百六十)しかし、実に「愛の戦争」では、お延にとって勝つことはなかった。

津田の温泉場に出かける前もそうである。敏感でありながらも津田に騙されたお延にとって、「小林の残酷に残して行った正体の解らない黒い一点」、また「お秀の口から迸はしるように出た不審の一句」、つまり「津田の腹のなかにいるこの相手を」(百十二)忘れられないのが最大の不安である。寂しさと危機感を強く感じて、その時津田を突き破ろうとした。

「隠さずにみんなここで話してちょうだい。そうして一思いに安心させてちょうだい」。津田との対決の最後に「お延は急に破裂するような勢で飛びかかった」(百四九)が、しかし、津田は過去のこと、温泉場へ行く本当の目的などを打ち明けずに出かけた。精一杯の努力を重ねて、いつも勝つようなお延は津田の彼女に対する慢心を打ち砕くことが出来なかった。津田はお延に対して気の毒という念を起したが、お延に寄せてきたのは軽蔑と同情だけであった。

結局、津田はお延との間が破綻する宿命ではないかと恐れる。更に、お延を待っているのも必ずしもよい運命ではなくて、最後に窮地に追い込まれるのは、所詮津田だけではなく、お延も同じではなからうかと思う。お延の追及したのは目には見えるけれども、掴みどころのない空中の雲のようなものである。二人は結婚したが、津田はお延の愛

を心から認めていないように見えるし、「平生からお延の直覺を悪く評価していた」。(百十五) そして、「過去」を持った津田は「自分に大事なある問題の所有者であつた」。(百十五) それを解決しなければ「愛と虚偽」も区別できないぐらい迷っているの、新しい生活には身を投じることが出来ないわけである。「彼女が津田に対して恋愛幻想を築き上げたのは、最初から間違えた、津田は彼女の愛に値しない男であつた」⁽⁹⁶⁾と菊地昌実の結論であつたが、作品から見れば、お秀を通して津田夫婦に「持ち来されそうに見える葛藤」に対して、お延は「それを切り抜けて行く覺悟をもっていた」が、津田が「自分の肩を持つてくれ」るかどうかが、「彼女には七分通りの安心と、三分方の不安があつた」。(百十二) 仮にお秀を通して家族の葛藤は片付けられても、清子を通して津田の「精神界」の葛藤は何分の不安があるかは、中々推測しがたい難問である。近代的な女性と当時の社会の桎梏は往々にして悲劇を齎するのが常のようである。お延の場合がまさにそれであろうと思われる。

「漱石の一生は、愛のために悩みつづけた一生であると言つて可い。(略)『明暗』における中心問題もまた、愛の問題である。夫婦間の愛の問題である。ただ『明暗』が是までの作品と違ふ所は、漱石が、主人公の津田とともに、女主人公のお延を、お延の内部から描いてゐるといふ事である」⁽⁹⁷⁾お延のほかに、清子、お秀、吉川夫人も生き生きとして描き、漱石のほかの作品には見られない個性の鮮明な女性像を注目すべきであると思われる。

五

漱石は「人間の救い難さ、捕らえ難さを深く実感し、人間の根源的寂しさを見つめながらも、なお一層人間へのかぎりない懐かしさ愛おしさを深くしていく中から『道草』『明暗』が書かれるのである」⁽⁹⁸⁾と細川正義が語った。急速に西洋化してゆく激動の明治末期、大正期という文化的背景の中で、漱石は日本の近代社会に生きている人間の「夫

と妻、親と子、兄と妹、友人、親戚、上司と下僚など、ひとが日常的な生を営むかぎりには避けられぬさまざまな人間関係が、『明暗』の世界には網の目のようにしつらえられている。⁽¹⁹⁾そのさまざまな人間関係を通して、作品の真相と狙いを表している。また作品の土台にもなっている。作品の冒頭で、患者は医者者の診察、再診察と診断により手術で救い上げられるのと同じように、津田夫婦を中心とした近代人のエゴイズムと本来の姿を、作者漱石は「精神界」の医者として丁寧に「診察」して、深く描き出し、「まだ奥がある」複雑な人間関係に於ける葛藤を「切開」することにより、人間再認識という救いを追及するのがこの作品「明暗」の主題ではないかと思われる。

「漱石は人間に興味を抱く小説家として、作中の人物の動き方、動かし方に新しく非常な興味を感じた。」⁽²⁰⁾クライマックスになる温泉場に凝縮された展開から見たら、新しいサラリーマン像として、津田の新生は「精神界」を手術することによるほかなしえない。自己再診察、再診断、再認識をして「手術台の上から下した」津田は生まれ変わるのであろうか、興味深く思われる。作品の中では登場人物がみんな互いに診察していて、誰もが自分しか医者ではないかのように見える。また誰もが時代の患者という宿命から逃れなかったようである。綿密な心理描写は「探りを入れる」こと、診察する方法である。その人間関係の摩擦と衝突は「根本的な治療」の「手術台」であろう。人間のエゴイズムを深く掘り下げて、変わりかける時代における自我の深みと葛藤を綴り挙げ、繊細な心理活動と複雑な人間関係を描き出したことが作品の主な特徴であると思う。

作品の最後に「清子はこう云って微笑した。津田はその微笑の意味を一人で説明しようと試みながら自分の室に帰った」(百八十八)ということと「未完」のままで中断される。津田は清子の「微笑」の意味を説明しようと試みた。自分で自分を客観的に見ようとしているように成長している。今まで以上に他者意識を持って清子の「微笑」を見ることが出来るようになった点に、津田の救済の可能性が示されているということができよう。

- (1) 「荒正人著作集」第五卷（三一書房、一九八四年十月）
- (2) 小宮豊隆「漱石全集」第七卷（岩波書店、一九七五年十月）
- (3) 荒正人「夏目漱石」（五月書房、一九五七年十二月）
- (4) 「大岡信著作集」第四卷（青土社、一九七七年四月）
- (5) 「大岡信著作集」第四卷（青土社、一九七七年四月）
- (6) 平岡敏夫「漱石研究」（有精堂、一九八七年九月）
- (7) 「漱石と則天去私 岡崎義恵著作選」（一九六八年十二月、宝文館出版）
- (8) 唐木順三「唐木順三全集・第十一卷」（筑摩書房、一九八二年五月）
- (9) 江藤淳「夏目漱石」（講談社、一九六〇年）
- (10) 「大岡信著作集」第四卷（青土社、一九七七年四月）
- (11) 猪野謙二「明治の作家」（一九六一年十一月、岩波書店）
- (12) 江藤淳「夏目漱石」（講談社、一九六〇年）
- (13) 江藤淳「夏目漱石」（講談社、一九六〇年）
- (14) 小宮豊隆「漱石全集」第七卷（岩波書店、一九七五年十月）
- (15) 「漱石と則天去私 岡崎義恵著作選」（一九六八年十二月、宝文館出版）
- (16) 菊地昌実「漱石の孤独——近代の自我の行方」（行人社、一九八四年六月）
- (17) 小宮豊隆「漱石全集」第四卷（岩波書店、一九七五年十月）
- (18) 細川正義「夏目漱石『心』論」（人文論究第52卷第三号、二〇〇二年十二月）
- (19) 三好行雄「鷗外と漱石明治のエートス」（力富書房、一九八三年五月）
- (20) 唐木順三「唐木順三全集」第十一卷（筑摩書房、一九八二年五月）

※本文並びに漱石の作品の引用はすべて「漱石全集」（岩波書店、一九九三年十二月～一九九六年二月）に拠つたものである。
※本稿は細川正義先生のご指導の下で、二〇〇七年十二月十四日関西学院大学大学院日本文芸研究会に於ける研究発表をもとにして、成ったものです。細川正義先生及び当日ご教示くださった諸先生方に深くお礼を申し上げます。

（ガオ ポンフェ・関西学院大学客員教授・蘇州大学教授）